
真・恋姫無双～最凶の御遣い～

ナマケモノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜最凶の御遣い〜

【Nコード】

N0769Y

【作者名】

ナマケモノ

【あらすじ】

とある少年、清水零夜。

彼が目覚めをさますと、そこは知らない場所であった。

プロローグ

時は、後漢時代。

大陸は荒れていた。政治は腐敗し、民が絶望そして賊になりはて略奪を繰り返す。

後漢は何かと対策をたてたが、すでにそれを抑え込むだけの力はずでになかった。

誰もが諦めかけていた。そんなある時、こんな噂がながれる。

乱世によって平和が崩れしとき、暗き闇より二つの流星飛来する
内一つは、天の御遣いに乗せ、乱世を沈静させるであろう。

大陸中この噂でもちきりであった。

これは、そんな時代に降り立った少年のお話である。

プロローグ（後書き）

どうも、作者です。

短いスタートですが、よろしく願いします。

1話 始まりは突然に。

俺の名は、清水零夜。

どこにでもいる一般人・・・とはいえない。父親の家系は代々、武人の家系で特に祖父と父は異常なほどの武人で、周りの人からは「本当に同じ人間か？」と言われるほどである。

まあ、当然息子の俺もその血を受けついでいるわけだが。

必然的に俺も鍛錬を受けていたが、これがまた凄まじいこと。

多種多様の武器（本物）を使ったり、俺が無手で親が武器を使用して攻撃したり、野生の熊と戦わせたり、色々ありすぎてきりがない。勿論無傷ですむわけがない、攻撃を避けそこなつて右目はズバツと斬られたり（奇跡的に大丈夫だった）父親・祖父同時に相手したとき何回死にかけたことか。まあそのおかげで親を凌駕するほどの力を得たわけだが。

そんな鍛え上げてくれた親だが、少し前に亡くなった。あんなに異常な人といわれていたが、やはり人の子死ぬときは普通に死んでしまふ。

亡くなる前に親は「自由にしろ」といわれた。その言葉どうり俺は自由に生きていた

鍛錬したり、本を読んだり、料理を覚えたりして自由に生きていた。そんな日の夜

（清水家）

「しばらく使ってないからだいぶ汚れてるな。」

今、俺は家の家宝の手入れをしている。しばらく使っていなかっためだだいぶ汚れていた。

「よし、これで終わり！」

綺麗に磨き上げ先ほどとは嘘のように輝いていた。

「しかし、やっぱり武人の家系。家宝も武器とは……」
そう親が残した家宝は三つの武器であった。正直これをもらっ
てどうしろと？と思う。

まだ世が戦争している時代ならまだしも、今は平和な世これらが使
われるわけではない。

「まあ、貰える物は貰っておくけど……」
それらを元の位置に戻しておく。

「ん、もうこんな時間か。」
ふと時計を見ると日がかわっていた。俺はこれ以上起きてもしよう
がないので早々に寝ることとした。
ふと思う

「あの武器が存分に振るわれる世界があればな」

そんな世界があるわけないといつも思うが、時々思う。自分の力が
その時代どこまで通用するかを

「ま、思ってもしかたない寝よ寝よ」
そうして俺は夢の世界へ旅立った。

今度目を覚ました時、まさかあんな事になるとは、知るよしもない。

1話 始まりは突然に。(後書き)

次回いよいよあの世界へ！

2話目覚めた場所は(前書き)

連続投稿。

いけるとこまでいってみよう。

2話目覚めた場所は

「ここ、どこ？」

可笑しい。俺たしかに自分の部屋で寝たはずなのに。

「なぜに荒野？」

そう目の前に広がるのは広い空、そびえ立つ山、そして荒野。うんどう考えても俺の家じゃないな

「しかもなんで私服に着替えてるんだ？」

俺確かに寝巻きで寝たんだが……

は！？まさか新手の誘拐？！

「おい兄ちゃん。」

いやいや、まてまてだいたいここまでしたら気配できずくはず

「おい聞いてんのかガキ！」

そしたらそいつはかなりの実力。ふうむ世の中は広いね。

「いい加減にしやがれこのクソガキ！」

うるさいな〜人があれこれ考えてるのに誰だよいったい

そう思い声のするほうへ振り向くと、

「……………」

俺の目に映ったのは、小汚い服を着た

「山賊？」

だよなアレ、どうみても

「やつと気づきやがったか」

「おいガキその輝く服を俺たちに寄越しな」

「よこせなんだな」

と言つ三人組み。背の高い男、小さい男、なにやら色々背負ってい

るデブ。

うん本当になにこれ

「いやいや意味が分からん」

「いいからとつとと寄越しな、死にたくなかったらな」

そう言う背の大きい男。なんでこんなどこにでもある服をほしがるんだろ？

「こんな服どこにでもあるだろ？」

「なに分け分かんねーことを」

「兄貴もう人思いにやっちまいましたよ」

と小さい男が鞘から剣をとりだした。

(本物?)

奴がとりだした剣、どうみても斬れる剣だ。しかしあんな形みたことないな

「服は汚すなよ、チビ」

「分かってますぜ兄貴。へへ悪く思うなよ」

そう言われチビが構えながら近付いてくる。ふむ……

「死にな!!」

そして一気に詰め俺の頭部を狙ってきた。俺は慌てることなく最小限の動作で避け相手の顔面に拳を

「メガトンパンチ」「ごはあ!」

おー綺麗にはいったな、チビがふっとんでいつちやたよ

「ち、チビ!おいデブいけ!」

む、今度はデブかこっちにくるなりいきなり腕を振り下ろしてきたよ。

じゃその力利用してやるか、そのまま相手の腕つかみ

「一本背負い!」 「ぶふ!」

すごい音をたて、デブ背中からダイブ。あゝいたそ

「な、でデブまでなんて」「さてと」「ひ!」

チビが使ってた剣をアニキという奴の首筋にあてる。

「俺の勝ちだねお兄さん」

「くそなんなんだてめえは」

そう言われてもな、人つていつても信用してくれそうにないしな
ー、おっとそんなことよりも

「俺の質問に答えてくれるかな、そしたら命はとらないから」

「……………本当だろうな」

よし、これで情報が聞けるな。さてなにを聞くかな……………

「……………」

うーん聞けば聞くほどありえないな。ここは揚州と言われる場所であ
こうに見えるのは寿春成といわれここを治めている袁術がいること
今の時代が後漢で零帝が治めていること。

これらのワードから導き出される答えは、

「三国時代かよ……………」

三国時代、蜀の劉備・呉の孫権・魏の曹操が己の理想のために民の
ために争った時代。

そんな時代に自分がいる。え、なにこれタイムスリップなのこれ

「大丈夫か？兄ちゃん」

む、賊に心配されてしまった。

「大丈夫、受け入れがたい現実から逃げてるだけだから」

「??????」

「他に何か噂話とかある？」

とりあえず話しを変えてみる。

「？そうだな、管亥の占いと伝説の武器くらいかな」

管亥の占いか……………興味がないからパスとして

「伝説の武器？」

「ああ、結構な業物らしくてな普通の人じゃ扱えないらしい」

……………あれー、なんでだろー非常に俺その武器知ってるような気
がする。

「ちなみに特徴は？」

「たしか袁術のところにあるって噂だったな、たしか手甲のような
・・・」

うんやっぱりだよ。なんでアレもこっちにきてるんだよしかも伝説
化してるし・・・ということは後二つも来てるなこりゃ。

「はー、分かったどこにでもいっていいよ。」

首に当てていた剣を下げ、アニキを解放する

「あ、ありがとよ兄ちゃん。もう悪さはしねーよ、おいチビ・デブ
いくぞ！」

アニキが他を起こしてさつていった、いろんな荷物をおいて。そう
いえば俺この国の金とかなかったな

「悪い気がするが、もらっておこう。こんなとこで死にたくないし
な」

腰に剣・お金・食料をもち、マントみたいなものを羽織った。

「とりあえず寿春成とやらにいつてみますか、いろいろ情報も聞き
たいし」

そしてそのまま目的地にむかって歩き出した。しかしなあゝまさか
昨日言ったことが現実になるとはね

ま、とりあえず頑張ってみますか。闘って生き残って、平和な世界
を築きあげるそんなとこかなゝ、正直めんどくさそうだけどね・・・

・・・
そしてそのまま城へむかった。

2話目覚めた場所は（後書き）

むう、やはり駄目文にしか見えん。もつと勉強するか
次回、零夜は城に行き情報聞き回る。そんな時とある人物と出会う

3話偶然の出会い？(前書き)

遅れて更新です

楽しめたらなによりです

3話偶然の出会い？

零夜 side

ふくむ、ここが寿春城か)

あの後、そのまま城にむかった。途中門番の兵士に止められてあれこれ質問された。

まあなんとか納得してもらったんだがね。

で、町をみて正直よくはない。人からは覇気があまりないし、兵はなんだか偉そうにしてるし、家とか店は荒れてるしな。まあ袁術だからな。あと側近は張勳というそうだ。

袁術

名家袁紹の弟で、かの仁君劉備を破った実力もち、のち皇帝を名乗った。だが自己中心的な行動が多かったため、部下に見放されて惨めな最後をとげた人物。

張勳はよくわかっていない。

まあここまでは大いだいたい俺の歴史と似ているからいいんだが、一番驚いたのが……

二人とも女性だそうだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・た

しか二人とも男だったよな。

タイムスリップじゃないのこれ？パラレルワールドの方なのか

まあいいか、別に問題ないし。

それから俺はあの武器について聞きまわった。聞くところによるとあの武器は袁術に献上しようとしたところ

袁「蜂蜜水以外はいらぬのじゃ〜」

だそうだ。そのあと持っけていてもしょうがないということで捨ててしまったそうだ。

いやいやいやいや、我が家の家宝捨てるなよというか蜂蜜水以下かい、すげーシヨック。

まあ、ある方法で捜して無事にみつけたけどね。

「まさかこんなに疲れるとは・・・・・・飯でも食べにいい。」

俺は腹を満たすべく店へむかった。

?????side

「もう、イライラする!」

怒っている私は早々に城からでていた。

「落ちて雪蓮、今に始まったことではないだろ」
後ろから冥琳にいわれる。分かってるけど〜

「だって袁術ったら、前の賊討伐の報告したのに、遅いとかそれでもわらはの軍かえとかいうのよ」

その時の袁術・張勳の顔を思い出す・・・う〜〜またイライラしてきた。

「我慢だ雪蓮、私たちが再び力を取り戻すまでの辛抱だ」

分かってるわよ〜、でもこればかりはね我慢できないのよね

「はーわかつたわ、帰りに食事して帰りましょう。勿論お酒付で。」
え、嘘本当に！

「いいの冥琳!？」

「今回だけよ」

やった、そうと決まればいそがなくっちゃ、祭に怒られちゃうからね。

私は急ぎ足で店に向かった。

「そういえば雪蓮、管亥という人物を知っている？」

私が料理店にむかおうとしていると冥琳が聞いてきた。

「管亥？たしか変な占い師だっけ」

「その占い師だが、つい最近こんなことをいったそうだ。」乱世に

よって平和が崩れるとき、暗き闇より二つの流星飛来する。内一つ

の流星は天の御使いをのせ、乱世を沈静するであろう”とね」

冥琳がそう説明してくれた、ふーん天の御使いねー

「本当かしら、うそ臭いわね」

「そうとも言い切れん、この近くで流星が落ちたそうさ。後その近くで人を目撃したらしい」

と言うことはその人が天の御使いの可能性が高いということね・・・

・、まあ今はどうでもいいけどね！

「そんなことより、はやくいきましょ。お腹空いちゃった」

そういつて私は冥琳をひっぱっていく。

「まったく・・・あまり飲みすぎるなよ雪蓮、仕事が無いわけでは
ないからな。」

むう、そこまでいわなくても分かってるわよ。冥琳も一言多いんだ
から。

そのまま冥琳をひっぱり近くの料理店に行こうとしたとき、

「さつさとしゃがれ！！こいつがどうなってもいいのか」

先のほうから男の声が聞こえ、近づいてみると三人組の賊が女の子
を人質にとっていた。

「や、やめてくれ娘を離してくれ！」

父親が賊の頭らしい人物に頼み込んでいる。周りには袁術の兵が倒
れていた。どうやら賊にやられてしまったみたい。

「娘を助けたかったら、金と馬を今すぐ用意しな！」

「なんだな」

背の低い男と太った男が要求を突きつけていた。せつかく人が気分
直してお酒をのもうとしようとしたのに・・・、やっぱり賊は
殲滅しなきゃだめね

「ねえ冥琳」

殺っちゃっていい？と聞こうとしたとき

「こりない人達だね、お兄さんたち」

私の後ろから声が聞こえ、振り向くとそこには不思議な服を着て右
目には鬮體が何かを銜えている絵がはいった眼帯をつけた少年がい
た。

3 話偶然の出会い？（後書き）

中途半端にだしてしまいました、やっぱりむずい。頑張らないと感想等よろしくお願いします。

4話出会いと別れ(前書き)

零夜は賊と対決する

そして・・・

4話出会いと別れ

「なんでこうなった？」

地元の人から聞いておいしいお店を教えてもらいそこにむかっていたんだが……

「なんでこうなった？」

大事な事だから二回いきました。大事だよこれ。

「て、てめえはこの前のクソガキ！」

目の前にはついこの間逃げた三人組がいる。兄貴が人質をとっていた。

「ここであつたが百年目、この前の借りを返してやるぜ！」

……

は？

「俺、なにかした？」

「な、忘れたとかいうんじゃないぞ」

うーん、なにかしたか俺。記憶にないんだが……

「なんのことやらさっぱり……」

「こ、この野郎……もういいチビ、デブ！殺れ」

そういうとチビ、デブが俺に近づいてくる。うーんこのまま戦ったら周りに迷惑かね……

「みなさんは、離れてください。危ないですからー」

そう言うつと周りが距離をとる。物分かりがよくて助かる

「おいこら、周りより自分を心配しな」

チビがこの前と違い双剣を構えていた。剣の時と違い双剣のほうが長けているのか前の時と違ってみえた。

「デブはここでみてな、俺一人でやる」

どうやらチビ一人でくるらしい、デブはわかったんだなという様子見している。

「この前は油断したが、今日はそうはいかねえスタスタに斬りさいてやる」

チビが殺気を俺にぶつけてきた……………それに対し俺は

「ふあ~~~~」

あくびをしました。だって暇なんだもん

「な、てめえ馬鹿にしてんのか！」

「だって暇で暇で…………ふあ~~~~」

本当のことだしね、あ、やべまたでそう

「ふ、ふざけるな————」

よほど感にさわったのだろう、すごい勢いで斬りかかってきたが最低限の動きでかわす。

今度は左手の剣で水平に斬るがしゃがんで避ける、さらに右手で振り下ろす、痛そうなのでそのまま後ろに下がって避ける。

「おら、どうした俺が強すぎて手も足もでないのか！」

そのままこちらに近づいて両方で斬りかかってきた

めんど

ガキ—————

「な?!」

止めれないと思ったのかチビがびっくりしている

「飽きた。というかアンタ弱い」

「な、なんだと」

そのまま双剣を弾き距離をとり、姿勢を正す

人数相手に有利だがこういう一騎打ちみたいな状況では……

攻撃しつづけるデブに聞いているかどうか分からないが避けながら
少しずつ近づいていく。

「だなーーーーー」

再び振り下ろした木槌を避け、一気にデブの懐に入り

「大振りの攻撃が仇となり、隙ができやすいんだよ」

剣を振り下ろし、デブの体に深く切り裂いた。デブは絶叫をあげて
後ろに倒れた。

ズドーーーーー

倒れたデブの横を通りすぎて兄貴に近づくと

「ば、ばかな……」

兄貴は信じられないと言わんばかりの顔でみている

「く、くるな！近づくとこいつの命がないぞ」

兄貴が娘に短剣を当てて脅してくる。そのまま俺は気にせず近づくと
「本当にやるぞ、本気」どうぞ「な?!」

ありえない一言で兄貴が動揺しており、周りの人々をざまめいてい
た。娘も動揺してるな

「だって今あんたは人質がいるおかげで有利にたっている。でもあ
んたが娘を殺したらその有利が一気に不利になるけど？それでもい
いならいいけど」

あきらかに動揺してるな、目が泳いでるし。周りの声が俺に対し「
ひどい」「悪魔」とか言っていた。

いや本当のことだしな」とその時
「ちきしょーーーーー」

兄貴は混乱し首に当てていた短剣を首から離れて上にあげ一気に振
り下ろそうとしていた。ここからでは走っては間に合わないため縮
地を近づき腕を掴んだ。

「な、いつの間に……」

「だめだめ、一度突きつけたものを下げたら」

笑顔で話すと彼は恐怖に満ちた顔になり

「この化け物が――――――」

「それはどうも」

兄貴の腕そのまままひっぱり民家の壁に投げ飛ばした。そのままぶつかり兄貴は動かなくなった。気絶したのかね？

うお――――――

「??????」

急に俺の周りにいた人々が戦いが終わった途端雄叫びを上げていた。なぜ？

「すごいなあんたかつこよかったぜ」

「別にたいしたことじゃ「あ、あの」はい？」

さきほど人質だった娘が俺に近づいてきていた

「助けていただいてありがとうございます」

先ほどの件にたいして礼をいつてきた。別にいいんだけどね――

「別にたいした事じゃないよ、君が大丈夫だったし（ニコ）」

「／／／／／」

あれ、なんで顔赤くなってるんだろ？どこか気分でも悪いのかね？

「どけどけど、道をあけんか！」

不思議がつていると袁術の兵が来たのか声を上げながら近づいてくる。うーんめんどそうだな

「ねえ、きみ」

「は、はい／／」

まだ顔が赤いんだがまあいいか

「とりあえず俺逃げるから後よろしく」

「……え、それってどういう」よろしくね――「ちよっ?!」

めんどくさいのでその場を逃走。さて飯食いに行くかね。

そのまま当初の目的のため料理店へむかった。

冥琳 side

袁術の兵が来て沈静させ賊を連行していた。それにしてもあの少年・

・・・

「ねえ冥琳」

私が考え事をしてしていると、雪蓮が声をかけてきた。

「どうかしたか雪蓮」

「あの子なかなかいい武をもってるわ」

「ふむ、たしかにいい武をもっているが賊相手ではな・・・」

たしかに賊にしかも三人相手（事実上二人だが）に勝っていたが所詮賊だ。それ以上に強者はたくさん存在する。雪蓮もそのひとりだからだ。しかし・・・

「どうしたの雪蓮、あのくらいの武の持ち主ならいくらでもいるじゃない？」

なぜ、雪蓮がああ程度の武に気になっているのが聞いてみたが

「うーっーん、分からないけどなぜか気になるのよねー」

自分でも分からないと言ってきた雪蓮、まさか・・・・・・・・・・

「また、勘？」

「うん勘」

またか・・・・。雪蓮の勘はよく当たるといつか外したことがない、この勘に助けられたりするが正直ここまで当ててしまうと軍師が必要なのか？と思ってしまうほどである

「そうだとしても、その子はいないんだしどうしようもないでしょ」
戦いが終わると彼はそそくさといなくなっており、この場にはいない。
つまり手がかりがない以上探しようがないのだ。

「ぶっ、そんなこと分かってるわよ」

頬を膨らませブーブーと言ってくる……もつすこし王ということをおぼえてほしいわ

「ほら雪蓮ここにいってもしかたないわ、予定どおりに飯を食べにいきましょう」

「あ、そうだ忘れてた、冥琳速く速く！」

雪蓮は走りだし、私を呼んでいた。まったく……

「へいらっ……あ、これは孫策様」

料理店に入るといつものように大将が働いていた

「おじさん、どうも元気だった？」

「うちは元気が取り柄だからね」

二人が気さくに話しあっていた。この大将とは何回か通っていた気が合うようになっていた。

絶えず話が続いているので、私は雪蓮に呼びかけた。

「雪蓮、そこでいつまでも話をしないの店に迷惑だろ」

雪蓮は私の声に反応してはっとしていた……忘れてたのね

「そうだった、おじさんいつものとおいしいお酒を「大将」、ご飯おかわりー」え？」

注文しようとしたとき、聞いたことのある声だったので雪蓮が振り向き私を見ると……

さきほどの少年が食事をしていた

「君は、さっきの……」

零夜 side

「君はさっきの……」

俺が料理店にはいり飯を食べていると、誰かに話しかけられた。振り向くと知らない女性が二人いた

「……どちら様？」

この世界に知り合いなんていないんだけど……

「ねえ席いいかな」

桃色のロングヘアの髪で、腰には立派な剣をもった女性が話しかけてきた。

「別にいいですけど……」

「そうよかった。冥琳こつちこつち」

女性が呼ぶと眼鏡をかけた臍をだした女性がこちらきて一緒に座る。

「それで俺に何か？」

とりあえず分からないので聞いてみた。

「あなた、さっき賊を倒した子でしょ。なかなかいい武をもっているみたいね」

さっき……あーあれか。ということはこの二人はさっきの観戦していた人か

「まあ、そこそこは鍛えて「本当に？」はっ？」

なぜか桃色の女性にとめられた。

嫌な予感がする……

「意味が分からないのですが……」

「「じついう事・・・よ！」
いきなり俺にたいして殺気をぶつけてきた。しかも先ほどの賊とは
比べれないほどに・・・」

めんどくさ、とりあえず分からない振りをしておこう

「何をしているのかわからないんですが・・・」
隣の女性が驚いてこちらをみている

「お前なんともないのか？」

「言っている意味がわかりませんが（本当は分かってるけど）？」
正直このくらいなら平気だ。家にはこれが足元にも及ばないのが二
人もいたからね

「ふーん・・・」

殺気が消え俺をまた観察するようにみると

「あなた名前は？」

いきなり質問してきた。まあ名前ぐらいならいいけど・・・

「えっと、清水零夜です」

「清水零夜・・・うん覚えたわ、私のは孫策。字が伯符よろしく
でこつちが・・・」

「シュウユ、字はコウキンだ」

・・・は？孫策にシュウユだと

「?どうしたの君」

動揺していると孫策が話しかけてきた

「あ、大丈夫です」

落ち着けとりあえず整理してみよう

孫策

孫堅の息子で亡き父の跡をつぎ呉の基礎をつくった人物で江東の麒麟児といわれていた。みずから先頭にたち武もかなりのもの。数年で領地を拡大したが、26という若さでこの世をさっている
シュウユ

ずば抜けた知性の持ち主で、義兄弟の孫策・弟の孫権を支えていた。また容姿も美しく美周郎といわれていた。有名な赤壁の戦いで火計を成功させ（史実と演技では異なる）見事曹操の大軍団を退けた。しかしその後彼は病気で亡くなってしまふ。
なのだが……

また女性なのだ。俺の知っている二人は男なんだが……

ああでも袁術も女性だっけ……このままだと有名な武將は全員女性なのかね。

「みる雪蓮、いきなり言われたから困惑しているわよ」

「えーただ名前をいっただけじゃん」

二人が色々話している……あれ？そういえば

「あの一二人の名前と違う名前呼び合っているけどどう言う事？」

ピタッと口論を止め信じられないと言わんばかりの顔でこちらを見る。

「お前、真名を知らないのか？」

「真名？」

聞いたことがない。そもそも三国志にそんな風習はないはず、そう考えているとシュウユが真名について教えてくれた。

真名

家族や親しき人しか呼ぶことが許さない神聖なる名。もし軽々しく呼べば死刑にされても当たり前前だという。

まじかい・・・と言うことがあれか、俺が勝手にシュウユの名をいつたら首が飛んでもいいと

真名怖え〜、呼ばなくてよかった本当に。話を戻すか。

「で、孫策さんでしたっけ？俺に何か」

孫策が思い出したような顔していた

「ねえあなた、私の所にこない？」

は？

「あの意味が分からないんですが・・・」
聞き返そうとすると

「雪蓮！？あなたどういうつもり」

先にシュウユが孫策にきいていた

「だってそうでしょ、私たちは力が必要な。この状況を打破するためにね」

「それは、そうだけど」

なにやらほっておいたら勝手に進みそうだな

「あのーすいませーん」

「あつ、ごめんね急に」

「別にかまいませんが、詳しく教えてくれませんか？」

よく分からないのでとりあえず詳しく聞いてみた

ここらはどうやら孫堅が治めており、不自由なく暮らしていたそうだが、予想外がおきた。先の戦で孫堅が亡くなってしまったのだ。その直後いままで同盟等築いていた豪族が一方的に破棄してきた。また内部でも逃走する味方の兵がでていた。すぐに孫策を大将にしたが止まらなかった。そんな時袁術がやってきたのだ。なかば脅迫ともとれる保護をするといってきたのだ。孫策は渋々承し袁術の客将となっているそうだ。

孫堅亡くなっていたの？しかももう呉は袁術に取り込まれてんの。早すぎじゃないのこれ

「でもこのままで終わらすつもりはないわ。今は力を蓄えてきが熟したら攻めるつもりなの。だからあなたにも手伝ってほしいのよ」
「どうやら孫策は先の戦いでえらくきになったようだけど、先ほどの実力のなら俺じゃなくてもいいようなきがするんだが……」
「別に俺ぐらいの実力なら他にもいるはず、なぜそこまで気にするんです？」

「私の勘がね、いれた方がいいっていつてるの。それが理由」

か、勘って……

とんでも発言をする孫策に俺はシュウユに聞こうとしたら、

「雪蓮の勘はほぼ当たる。軍師がいるのかとおもつくらいにね」
「……苦勞してるんですねシュウユさん。」

「ねえ〜いいでしょ、ちゃんと給付金もだすし寢床も用意するし悪

い条件「遠慮します」え?!」

「俺は今やることがあるんで、遠慮しておきますよ」

魅力的な条件だが俺にもやることがあるし、それに俺なりのやり方でいきたいしね

「む、どうしても?」

「どうしてもです」

どうしても孫策は俺を加えたいらしい、どうしたら諦めてくれるかね
「諦める雪蓮、清水はやることがあるんだ。それを妨害するのはよくないだろ」

隣でシユウユが雪蓮を説得し始めた・・・苦労してるんですね本
当に

「う、でも」

「雪蓮」

「・・・分かった、でも諦めてないからねそのやる事が終わったらまた誘いにくるから覚悟してよね」

なんか、えらい俺がほしいのね理由が勘違ってどうなのかもしれないけど・・・

「それじゃ俺はこれで」

話が終わったので店をでる

「あれ、もう行っちゃうの?」

「俺も用事があるんでね、それじゃまたどこかで、江東の麒麟児さん」

大将に代金を支払い店を出る。そのまま俺は次の武器の情報を手に入れるためとりあえず周りの人に来ていたら以外に早く情報を得た。どうやら幽州にあるらしい

で、場所が分からないので地図も購入して確認。

・・・遠いね、馬が必要になってくるねこりゃ

とりあえず馬は買えないため、他に必要な物を購入して宿に泊まり旅に備えることにした。

………そして、出発の時がきた

黄蓋 side

「ほう策殿がそんなに……」

昨日えらく機嫌が良く嬉しそうに帰ってきた策殿。いつもなら袁術相手なので機嫌悪く帰ってくるのだ

何かあったのか？と聞いてみると

「おもしろい少年にあった」

武は聞いた限りではそこまで高くないのだが、策殿の勘が働いたらしい。

ふむ………いつたいどんな奴なのじやろうな

「冥琳よ、その清水とやらの特徴はどんな感じなのじゃ？」

「右目には鬍髯が何かを銜えた眼帯をつけていたから、すぐに分かると思います」

右目に鬍髯の眼帯か………ふ~~~~む一度あつてみたいのう
そう思いわし達は森の中を歩き建業へむかっていた。

「ん、ねえ冥琳あれつて清水じゃない？」

策殿が指をさした先を見ると、眼帯をつけた少年が歩いていた
………あれが清水か、正直見た目は普通じゃの。

「ねえ冥琳。まだ納得してないの？」

「どうやら冥琳は納得しておらぬようじゃの」

「こればかりは雪蓮の勘でも納得できないわ。彼の武は本人がいつていたじゃない、どこにでもいるつて」

「そう、じゃあ証明すればいいのね……祭」

わしを呼んだため何かと思い聞いてみた。

「なんじゃ、策殿」

「祭、あの子を矢で射てちょうだい」

「……は？」

「策殿！？雪蓮！？」

「だって証明しないと納得してくれないんですよ、それに本当にあの程度の実力ならこの先生き残れないわ。それだったらここで死んだほうが彼のためよ」

「どうやら策殿は、彼ならわしの矢を避けれると思っっているらしい。

「自慢ではないがわしは武に自信をもっており、特に弓に関しては誇りにおもっているほど。」

「策殿、よいのか？」

「いいわよ、ね・冥琳」

「……後悔してもしらないわよ」

「冥琳の許可でてわしは少年の後ろにまわる。気配を消しそのまま奴の後頭部に狙いをつけた。」

「（悪く思うな、お主ぐらいの実力ではこの先生き残れん。ここで死んだ方がお主のためじゃ）」

「そしてそのまま矢を放った。」

「矢は一直線に奴の後頭部にむかっていく。やはり実力はそんなものかと、じっと見つめ」

「奴は避けた、しかもその矢を掴んだ。」

「な？！」

「そんなばかな、あの至近距離で後頭部からきた矢を避け、しかもそ」

れを掴むなどありえん！

奴はじつと矢を見つめていた。そして何事もないように歩き出し森の奥深くに消えていった。

「どう冥琳、私の言う通りだったでしょ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

策殿が冥琳と話ながらわしに近づいてきた。

「策殿は分かっておったのか？」

「勘よ、彼なら避けると思ったのよ。まあ掴むとはおもわなかったけど」

あいかわらずすごい勘じゃの。

「ふふふ、これでますますほしくなっちゃったわ。祭もそう思うでしょ」

たしかに奴の実力を考えると・・・・・・・・・・・・・・・・

「たしかに奴の実力はかなりのもの。われらに引き入れれば孫呉独立も早くできそうじゃな」

「そうでしょ・・・・・・・・？冥琳どうしたのさつきから黙って、やっぱり駄目？」

何を考えているのか冥琳は黙っていた。どうしたんじやいたい？

「いや、それについては私もよいと思っっている。ちよっと気になることがね・・・・・・・・」

「気になることじゃと？」

冥琳は他に何か考えているようじゃが・・・・・・・・

「ふーん、まいいじゃない。彼の実力がわかったんだからいいじゃない。ほらいくわよ冥琳、祭」

そのまま冥琳をひっぱり建業にむかって歩き出した。わしもそのまま歩き出しふと奴を思い出す

(ひさしぶりに面白い奴に会えたわ。これからが楽しみじゃ) そう思い策殿に追いつくためその場から去った・・・・・・・・

4話出会いと別れ（後書き）

冥琳の漢字が分からん。
辞典で調べるかな

〜設定1〜（前書き）

ちよつと書いてみました

（設定1）

清水 零夜

（しみず れいや）

身長 175cm

体重 65kg

顔立ちがよく、髪は短く黒髪。瞳は黒で右目は眼帯で隠してる
眼帯のマークはガンダムゲームの部隊のマークを入れている（理由は
気に入っているため）

服装は、聖フランチェスカの制服を黒くした感じでボタンは常に外
している。中のシャツは赤。

清水家の若き当主。幼きときから父・祖父に鍛えられたためかなりの
の実力。

があまりにも強すぎてまわりからは「人外の零夜」と言われていた。

性格はめんどくさい事には係わらないたくない主義。だが係わると
最後まで責任を果たす

仲間・味方には命にかえても守りとおす。

『ただなら・自由に』がモットーにしている（仕事はさっさと終わ
らす）

戦闘スタイル

主に賊が落とした剣を主体としている

氣も扱うこともでき、身体を硬化したり、能力向上も可。

また氣を放出したり、自分・相手の氣を高めて治療することも可能
(病気までは治せないため五斗米道ほどではない)

今は清水家の武器を集めている(残り2つ)

〜設定1〜（後書き）

技等が増え次第書いていこうと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0769y/>

真・恋姫無双～最凶の御遣い～

2011年11月7日10時01分発行